

生涯学習のスタイル 自己決定学習

J.Misonou

1、「学校教育」とは異なる学習のスタイル

- ・学校教育 = 知識伝達型学習
- ・生涯学習 = 創造的学習
- ・情報化社会の性質

「知識を伝達される」ことを目的とした学習を行おうと思えば、学校にいかなくともそれは十分に可能

あふれるほどの情報や知識を「何のために知るか」という問題意識を持つこと、手に入れた情報をその問題意識に照らして再構築する、主体的な諸資源のネットワーキング活動が重要になる

2、従来型生涯学習の側面

- ・職業教育、大学後教育、リカレント教育、成人教育、学校外教育プログラムなど同一に扱われており、学習という行為自体に意味や価値を見出すのではなく、それが将来もたらし得る利益に価値を見出すからこそする「用具的学習」
- ・D・A・ノーマンは従来の学校で行われるような学習と、ゲーム、スポーツの練習、趣味やレクリエーションのための学習といったインフォーマルな体験による学習とを次のようにまとめている。ノーマンによる「学校での学習」はここでは「知識伝達型学習」として述べてきたものであり、また、「インフォーマルな学習」は「創造的学習」とその多くの部分に共通するものを見ることができる。

インフォーマルな学習	学校での学習
構造化されていない	構造化されている
グループまたは共同での活動	個人での活動
学習者の立場から目標が動機づけられている	生徒の立場から目標が動機づけられていない
活動は魅力的---おもしろい	「おもしろさ」が直接には考慮されていない
割込みがない	絶え間なく割込みがある
「フロー」体験が頻繁にある	「フロー」体験はめったにない
自分でペースが決められる	ペースが固定的で強制される
テーマや時間、場所を選べる	テーマも時間、場所も決まっている

生涯を通じていろいろな環境で行われる	主として6歳から20歳少しまでの間、教室で、と限られている
--------------------	-------------------------------

『人を賢くする道具』p.53)

「フロー体験」とは何か

フロー体験 ("flow experience" Michael Csikszentmihaly, 1975) とは、実験心理学者、ミハイル・チクセントミハイによって名付けられ、次のように定義されている概念である。

「行おうとする活動が適度な挑戦のレベルを与え、活動を行う者がその挑戦に対して適度なスキルを持っている時に生じる、意識の集中と没入感を感じる経験」

このフロー体験は、チクセントミハイによれば、次のような状況下において起こりやすい。

- 1) 通常その経験は、達成できる見通しのある課題と取り組んでいる時
- 2) 自分のしていることに集中できていなければならない
- 3) その集中ができるのは一般に、行われている作業に明瞭な目標があり、
- 4) 直接的なフィードバックがあるからである。
- 5) 意識から日々の生活の気苦労や欲求不満を取り除く、深いけれども無理のない没入状態で行為している
- 6) 楽しい経験は自分の行為を統制しているという感覚をともなう
- 7) 自己についての意識は消失するが、これに反してフロー体験の後では自己感覚はより強く現れる
- 8) 時間の経過の感覚が変わる。数時間は数分のうちに過ぎ、数分は数時間の伸びるよう感じられることがある。

このようなフローという概念が学習活動と結び付くのは、学習活動は自己の成長であり、その自己の成長こそがフローの根底にあるからである。

チャレンジとスキルの均衡点がフローの状態であるが、このフローの状態は絶えず上へ上へと成長を目指す。人は同じことを同じ水準で長期間行うことを楽しむことができないからである。長くある地点にいと、退屈が不満を募らせ、再び楽しもうとする欲望が能力を進展させるか、その能力を用いる新たなチャレンジへと駆り立てるのである。このダイナミックなフローを得るための人間の行動は生涯学習の過程そのものなのである。

3、「学習」行動を忌避しようとする意識

「13年間または20年間の外発的に動機づけられた学校教育は、未だに不愉快な記憶の源になっているので、多くの人々は学校を離れると学習を投げ出してしまう。(中略)理想的には、外発的に課せられる教育の終りは、内発的に動機づけられる教育の出発点であるべきである。その時、学習の目的は、もはや及第する、卒業証書を獲得する、良い職業を見つけることではなくなる。それはむしろ、身の周りに生じることを理解すること、自分の経験のすべてについて個人的に意味のある感覚を発達させることである。(『フロー体験喜びの現象学』M・チクセントミハイ p.177)」と、チクセントミハイが言うような内発的

動機、すなわちフローによって導かれた創造的学習は、主体的に知を編み上げていくという点において、一種のネットワーキング活動

1) 知識の種類

【知識伝達型学習パラダイム】
あからじめ用意された
権威的知識を受け入れる

【創造的学習パラダイム】
学習者の周辺環境から発見し、
主体的に構築する知識

2) 学習の目的と姿勢

【知識伝達型学習パラダイム】
知識を獲得するために、受動的に用
具的側面から学習する

【創造的学習パラダイム】
自らの内発的学習動機に基づいて
主体的かつ能動的に学習する

3) 学習の形態

【知識伝達型学習パラダイム】
定められた時間と空間へアクセスする

【創造的学習パラダイム】
学習者の周辺環境へアクセスする

「自ら主体的に、状況に根付いた情報や知識を体系づけ、発信するという一連のプロセスを学習と捉える」

エットーレ・ジェルピ『生涯教育～抑圧と解放の弁証法～』から

「進歩的な生涯教育を構成する三つの要素は、自己決定学習であり、個人の動機（モチベーション）に応えるものであり、新しい生活の方法の中で発展する学習のシステムである。」（ジェルピ, 1983）

ここで言う「自己決定学習」とは、従来の学校教育の教師中心の知識伝達形態ではなく、なおかつ単なる独学、独習の域をも超えた学習者中心の主体的な学習のことである。学校という制度によって、もしくは職業上の用具的側面からの要請によってではなく、あくまでも内発的な動機づけによって学ぶ、フロー体験としての学習として捉えていくことが、創造的学習パラダイムにおいては大きな意味を持つのである。

< 状況に根付いた情報、知識 >

< 体系づける >

< 発信する >

<体系づける> , <発信する> というそれぞれのファクターの組み合わせによって特徴づけられる。これら要素がひとつとして欠けても創造的学習パラダイムであるということはない。あくまでもこれらの要素が密接に絡み合った複合的なプロセスとして見た時にそれは大きな意味を持つ

4、イヴァン・イリイチの、優れた教育制度の3つの目的

- 1) 誰でも学習しようと思えば、それが若い時であろうと、年老いた時であろうと、人生のいついかなる時においてもそのために必要な手段や教材を利用できるようにすること
 - 2) 自分の知っていることを他の人と分かち合いたいと思うどんな人に対しても、その知識を彼から学びたいと思う他の人々を見つけ出せるようにしてやること。
 - 3) 公衆に問題提起しようと思うすべての人々に対し、そのための機会を与えること。
- (イヴァン・イリッチ『脱学校の社会』p.140)